

## &lt;報 告&gt;

# コロナ禍と宗教

宮嶋 俊一（北海道大学大学院文学研究科）

## はじめに

今回の研究プロジェクト（船木科研「新型コロナウイルス感染症拡大下における、独居高齢者の孤立化に関する実証的研究」）では、独居高齢者への聞き取り調査を通じてコロナ禍における葬送儀礼のあり方、その変容についての研究を分担する予定である。だが、いまだ十分な聞き取り調査を行えていない。これまで札幌市内で2名にインタビュー調査を行ったのみである（2021年12月16日）。よって今回は、その調査結果と、さらに2021年12月28日に茨城県常総市S地区で行われた葬儀への参与観察の成果を参照しつつ、予備的な考察を行いたい。

## 前回の発表とその後

前回の研究会では、各種調査に基づきつつ、コロナ禍における葬儀の簡素化・簡略化の傾向を指摘した<sup>1)</sup>。さらに、そうした傾向がコロナ以前から存在してきたこと、すなわち「自分の葬儀で、遺された人たちの手を煩わせたくない」という声が少なくなかったこと（これまでの調査の結果）などから、発表者はコロナ禍によってそれ以前からの流れが加速したものと捉えようとした。だが、その発表に対し、地域差や個人差も存在するのではないか、といった指摘があった。さらに、2021年9月16日に放送されたNHKクローズアップ現代では「家族と“悔いなく”別れたい 多様化する葬送」と題し、以下のような内容が放送された。

核家族化や経済的理由などから、葬儀の簡素化が進んできた現代。いま、その流れに逆行するかなのような動きが広がっている。遺骨になった後でも葬儀を執り行う「骨葬」や「再葬」。各地の寺が始めたところ、「葬儀をやり直したい」という遺族からの依頼が相次ぐ。さらに、故人を自宅で1週間かけて見送る「自宅葬」にも注目が集まっている。コロナ禍で十分な見舞いもできずに身内を亡くした遺族は、住み慣れた家で最後の時間をともに過ごすことで、少しずつ死を受け入れていったという。「悔いのない別れをしたいー」、新たな“お見送り”について考える。<sup>2)</sup>

もちろん、量的調査によって、葬儀の簡素化の傾向をある程度まで示すことはできるだろう。当該の番組HPには、葬祭事業を手がける会社が、葬儀を行った経験のある全国の40歳以上の男女を対象に去年行ったアンケート調査を紹介している。それによると、主に家族だけで行う「家

族葬」、通夜を行わない「一日葬」、儀式は行わず火葬だけを執り行う「直葬」など、いわゆる「簡素化された葬儀」を合わせた割合が、初めて「一般葬」を上回ったとのことである<sup>3)</sup>。

他方、同じ葬祭事業を手がける会社が2017年に行った調査では、45%の人が「葬儀後に弔い不足を感じた」と答えているとのことである<sup>4)</sup>。こうしたデータや番組の内容を踏まえると、量的調査による傾向性に加えて、葬送への意識やあり方がより多様化していることが想像できる。それゆえに、今回の質的調査は、その多様性を知るためにも重要であると考えている。

## 今回の聞き取り調査から

他方、これまでに行った聞き取りにおいては、回数が少ないため、まだ十分な成果を挙げることはできておらず、さらにその方向性も見えていないのが現状だ。今回の調査は独居高齢者の暮らしぶりやそこで感じる困難について、またその困難を克服するための手立て・工夫（すなわち「いかにして生きていけばよいか」）について知ることが大きな目的であるが、そうした調査において高齢者の方に「自分が死んだらどのような葬儀をしてもらいと思うか」（すなわち「死ぬときはどうしたいか」）と問うことは難しい。そこで、コロナ禍において冠婚葬祭についての意識が変わったか、という問いを投げかけているが、なかなか回答が得られない。というのも、コロナ禍の中で、いま生きていくこと（例えば経済的な問題や人間関係の維持など）が課題となっていて、死んだときのことまで考えられないという現状があるからだ。葬儀などの冠婚葬祭を経験した人であれば、それなりに気づいたことや考えたことがあるだろうが、逆に、そうした経験を持っていない人にとって、冠婚葬祭について考えることはまさに「不要不急」ということなのだろう。よって、コロナ禍における宗教をテーマとした研究が一般的な人たちの意識と乖離していないか、確認することが必要だと思われる。

## 参与観察の結果から

では、実際に葬儀が行われた場合はどうか。これもきわめて限られた調査の結果であり、一般化することは難しいが、以下、2021年12月28日に茨城県常総市S地区で行われた葬儀への参与観察における葬儀社の方への聞き取りなどを基に、気がついたことをいくつか報告する。

コロナがもたらした変化として、従来は「通夜」と「告別式」をわけて行っていたのが、「通夜」は行わず「告別式」のみとするケースが増えたとのことである。また、その内容も、身内のみという形態が増えているとのことだ。これらは、前回の調査からも推測できることである。

さらに、葬儀の形式の変化として大きいのが、会食である。私が参加した告別式においても、昼食として弁当が振る舞われたが、ほぼ「黙食」で会話もほとんどなかった。葬儀担当者に聞き取りを行ったところ、この問題については、葬儀のホスト側とゲスト側での意識の差が存在しているという。ホスト側は参列してくださった方々に対して、せっかく来て下さったのだからおもてなしをしたい、という意識が強い。ところが、ゲスト側にそうした会食を嫌がる方が多いという。

きちんと確認を取ることはできていないが、この地域は住民の結束が強く古い慣習が残っているので、地元の人たちの間ではある程度「もてなし」が必要との感覚が共有されているのだろうが、他地域から葬儀に参加した人からすれば、その感覚を共有できないという状況が想定される。

今回のコロナ禍において、感染拡大の状況は全国一律ではない。それゆえ、それぞれの地域ごとに対応も分かれている。さらに、意識の面でも地域差は大きい。それゆえにこうした指摘が生まれてくることが予想される。

葬送に限らず、冠婚葬祭は人が集まる場（たとえそれがオンラインであったとしても）であり、そこに集まる人たちが多様であればあるほど、その運営が難しくなる。報告者は、意識の違いが多々存在することを前提としつつも、ミニマル・コンセンサスを形成せざるを得ない状況の中では、大きな動きとして簡素化・簡略化が進むのではないかと考えている。

### 補足的な考察～主として方法論的な視点から

上述の参与観察において「会食」についての話題が出ていたが、「宗教的な行為」とはいつでも、その行為（ここでは「会食」）そのものは日常的に行われていることであり、コロナ禍という状況においては、日常・非日常の区別なく対応（大人数での会食は控える、など）が必要となる。確かに、告別式における「会食」には相応の「意味」が与えられてきたのかもしれない（例えば個人への弔いなど）。だが、宗教的意味（＝重要性）を最優先できないのが、コロナ禍である。そうした時、簡素化・簡略化を宗教の衰退や喪失と捉えていくのか、それともそこで行われる行為（簡素化・簡略化した会食など）に新たな「意味」が見いだされていくのか、さらにそれによって人々の意識の変化は生じうるのか、なども今後の考察課題としていきたい。

本研究は、2021～2023年度文部科学省科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究(C)課題番号21K01836研究代表者：船木祝）の助成によるものである。

### 引用文献

- 1) 北海道生命倫理研究会第17回セミナー（2021年度夏季）における拙報告「コロナ禍の宗教葬送儀礼の変容を中心に」。
- 2) <https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4584/index.html>（2022年2月25日確認）。
- 3) 同上。
- 4) 同上。